

Title	実在的区別distinctio realisについての覚書：田口啓子君の批判に答える
Sub Title	Remarks on real distinction between existence and essence
Author	松本, 正夫(Matsumoto, Masao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.58 (1971. 12) ,p.17- 32
JaLC DOI	
Abstract	Actus of essence is form, and potentia of essence is matter. The form means definability of "what is", and plays the roll of determining principle ; the matter means indefinability of "what is" and plays the roll of limitting principle. According to the tradition since Pythagoras definability is "the determination by one" and indefinability is "the determination by two," or in other words, limitation. When we shift our attention from the dimension of essence to that of existence, actus and potentia, the fundamental concepts in metaphysics, come to relate themselves existence, and as a result our concern transfers to the division between actus of existence and potentia of existence. Actus of existence means esse simpliciter i.e. actus essendi, and this is existence in proper sense and is existence as determinig principle. On the otherhand, potentia of existence means esse quid as essence (whatness) i.e. modi essendi, categories of being in wider sense, and usually these are represented by the category of substance. Whatever hylo-morphological structure of substance might be, that is, either more material or more formal, the substance remains to be potentia against existence. As existence of a being proportionates to its essence, the essence itself constitutes an indispensable momentum of the existence. Not that the existence follows the essence, the essence follows the existence. Though the essence limits and conditions the existence, the essence cannot play the roll of determining in the place of existence. The roll of the essence in limitting and conditioning the existence must be preceded by the roll of existence to determine. The existence, after all, maintains its primacy over the essence. The distinction between existence and essence is real. Distinctio realis consists not only in the difference of things but also in a case, where the reason of distinction is recognized from the side of thing (a parte rei). Therefore there is exactly the same kind of distinction between existence as actus of existence and essence as potentia of existence, as that between form as actus of essence and matter as potentia of essence.
Notes	名誉教授宮崎友愛先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 実在的区別 *distinctio realis* についての覚書<sup>(1)</sup>

——田口啓子君の批判に答える——

松 本 正 夫

## 1.

経験はいつも「何か」という「である」本質をもった存在者の「がある」実存を自明化する。それは実存の自明化であるが、決して「何でもない」ところの本質なき実存の自明化ではない。自然的経験はつねに存在者の経験で、それは何らかの「もの」である本質に制限された実存の自明化ではない。もし「何であるか」という本質によって制限されない実存の自明化があったとすると、それは実存を制限する本質自体が再び実存であるようなものについてのそれであって、この場合にこそ無制限無条件の実存の自明化になりたつでもあろう。しかしそのような経験は超自然的に与えられたとしても、自然的には不可能である。何となれば、経験は自然的には何らかの「もの」の経験で、実存する存在者の経験でしかないからである。経験は経験された「もの」(本質)の実存体験でしかない。

このように本質と実存とは経験される存在者において深く関連しあっている「存在」の二局面で、実存しないものを存在者と呼ぶ訳にゆかないと同様、「何でもない」非本質を存在者と呼ぶ訳にもゆかない。両者は経験される存在者に不可欠の二契機であるから、両者が「がある」、「である」というふうに「ある」という共通言語によって表現されることには偶然以上のものがある。けだし言語は経験による自明化に対応する記号に他ならないからである。

ボエティウス以来、そしてトマス・アクィナスによって受継がれた言葉遣いによると、実存 *existentia* は単に *esse* と呼ばれ、また本質 *essentia* は *quod est* と呼ばれている。そしてトマス自身は実存を「存在することの現実態」*actus essendi* とし、また本質を実存が自らをそれに適合させるところの「存在することの種々の様式」*diversi modi essendi* とし、十個の範疇を数えあげている。<sup>(8)</sup> たしかに「S がある」*S est, S existit* という実存に対して「S は P である」*S est P* という広義の本質は十個の基本的述語型 *decem praedicamenta* に分類される。しかし実体以外の諸範疇は「何であるか」というそれらの本質がつねに他の「何であるか」によって条件付けられ、結局、それらにとって他者である実体の「何であるか」によって定まるところの他者依拠の相対的本質であるのに対して、実体範疇の「何であるか」という本質は決して自ら以外の他の本質に依拠せず、その「何であるか」が自らのみで無条件的に定まってくるところの自己依拠の絶対的本質である。この意味で「である存在」の十個の範疇は広義にはいづれも本質的であるが、狭義に無条件的には実体範疇に限られる。そして実体以外の諸範疇はこれに対して偶性（広義）と呼ばれる。なぜ（広義）かといえ、これら九範疇は更に体系的に「属性」、「偶性」（狭義）、「適性」と分類されるからである。しかしいづれにせよ、すべての存在様式を包含する広義の本質は「ものはものそのものである」という自己依拠の狭義の実体本質に還元され、それによって諸本質のすべてが代表される。換言すれば、狭義の本質たる実体は範疇として広義の本質の一つではあるが、それは優越的 *par excellence* に本質なのである。

形而上学の根本原理たる質料因と形相因とは実はこの意味での実体の可能態と現実態とを意味している。つまり存在者の実体本質の「何であるか」の不定性が質料因であり、その同じ実体本質の「何であるか」の一定性が形相因である。ここで重要なことは実体本質は単に形相因に係わっているだけでなく、質料因自身も実体本質を前提していることである。実体

本質を形相因にのみ係わらしめたプラトニストに対してここにアリストテレス主義の特長が認められる。形相因が実体本質の一定性の原因であることから、それは規定原理で積極原理であり、それに対して質料因は被規定原理として形相の規定を受容するだけの消極原理だとする見方があるが、これもプラトニズムの<sup>いき</sup>息の掛った観念論的な見方で、このことがどのくらいアリストテレスの存在論的な立場を歪めてきたことか。質料因も形相因と全く同様に実体本質を前提したものであることは、質料因がただ単に被規定の消極原理にとどまらないことを意味している。ピタゴラス以来、奇数の「一による規定」のほかに、偶数の「二による規定」があり、これがプラトン後期の「不定の二」の思想につながり、アリストテレスの質料原理に伝承される。いま線分上に単的に一点をきめるのが「一による規定」とすると、この同じことを線分上にきめられた二点を漸次接近させることによって達成しようというのが「二による規定」で、この場合には初めから一点は定まらず、相接近する两点の間にいまだ自由度が残されている限り、無限に振動する不定性がそこに成立する。これは規定に対する条件付ないし制限に該当するもので、質料原理は正にこの制限原理として積極性を保持していると考えられる。形相因が規定原理として積極的であるなら、質料因は制約原理として同様に積極的であり、質料因が被規定原理として消極的であるならば、形相因もまた被制約原理として同様に消極的である筈である。実体本質の一定性としての現実態と実体本質の不定性としての可能態とはこの意味において平等であり、形相因と質料因とは実体本質の原理として甲乙なく、相関的でさえある。

しかしプラトニズムの残滓はトマスの時代にも、トマスがその影響を受けたアラビアのアリストテレス主義の中にすでに強く働いていたので、トマスはプラトニズムに倚ってたつ西欧に身を置きながら、その環境に抗してアリストテレス主義を移入し、更に移入されたアリストテレス主義自身のなかのプラトニズムとも戦わなくてはならなかった。だいたいプラトニ

ストは質料因と形相因とをともに実体本質に限定することを好まず、形相因が実体的であるにしても、質料因には実体性格をいっさい認めたがらなかった。そのため実体本質とその他の偶性本質とを広義の本質として共通にとらえ、その意味での本質の一定性を形相因、その意味での本質の不定性を質料因とする。本質を広義に解すると、実体本質は自己依拠の本質性ゆえ、一般に他者依拠の偶性本質より一定性の度合いが強いとされるので、実体本質は形相因でありえても質料因的でありうる筈なく、質料因はもっぱら偶性本質の不定性のなかにのみその存在理由をみいだすことになる。かくて質料因は実体範疇を前提しての形而上学的原理から除外され、せいぜい偶性範疇を前提しての現象論的原理に過ぎないものとされる。これに対して上述したように質料因を狭義の本質たる実体範疇の次元に留まらしめたこと自体たしかに一つの戦いであった。

しかしプラトニズムに対する決定的な戦いはこれである。実体本質の一定化の原理たる形相的規定原理が不定化の原理たる質料的制約原理から離脱しえて、純粹形相 *forma pura* が成立したとしても、それはあくまでも存在者の実体本性の純粹形相化《本質一定化の極限》であって、そこから実存の現実態の一かけらもでてこないということである。プラトニズムにとって本質の現実態としての形相性の増大と実存の現実態化とは正比例しており、純粹形相化が進めば進むほど殆んどそれに実存を拒みきれなかった。それゆえ「形相中の形相」というべき実体形相の現実態の頂点は実存することの形相 *forma essendi* と呼ばれ、正に実存の現実態以外のものを意味していなかったのである。

トニズムはこれに決定打を与えた。実存は本質からでてこない。従って本質の現実態たる形相がいくら背伸びしても実存の現実態には達しえない。実体本質はたしかに実存することの様式 *modus essendi* の基本的基礎的なものであるにせよ、それは実存することのありかたにすぎず、実存することの現実態 *actus essendi* を決して生みだすものではない。実存するこ

とのありかたとしての実体本質にはより質料的なものからより形相的なものがあり、いわば実体本質のより不定的な可能態から実体本質のより一定的な現実態に到る、ありかたの様々の段階があるにせよ、それらは実存することの現実態に対しては全く等距離を保った実存の可能態でしかない。実体本質がより形相的であればそれだけ本性は不変的であり、実体本質がより質料的であればそれだけ本性は可変的であるが、そのようなものの本性にとっても、それが実存しないことに対して実存するという一点では全く平等で、その実存性に甲乙がないのである。<sup>(4)</sup>

形而上学の基礎概念としての現実態 *actus* と可能態 *potentia* とは実体本質に関して形相という規定原理と質料という制約原理とを与えてくれた。そして実体本質の可能態としての質料基体は実体本質の現実態としての実体形相を制約し条件付け、その限りにおいて何らかの質料的形相 *forma materialis* という合成実体が成立する。しかし実体本質の規定原理たる形相が一切の制約を除外して無条件的であったなら、純粹形相 *forma pura* という実体本質が成立する。これと同じように現実態と可能態の基礎概念が実体と本質とに関連させられると、実存の現実態はいつも実存の可能態たる本質、特に実体本質によって条件付けられ制限され、そこに存在者が成立する。形相が質料によって制限されるように実存は本質によって条件付けられる。実存は *actus essendi* として実存の現実態であり、これが実存の諸様式 *modi essendi* を代表する実体本質によって条件付けられ、制限されるのである。しかしもしこの条件付け制限する実体本質自身が再び実存の現実態であるとすれば、条件付けられ制限される筈であった実存の現実態の規定は全く無条件、無制限になってしまって、そこに純粹現実態 *actus purus*、或いは実存そのもの *Ipsium Esse* としての神の問題が登場してくる。

実体本質の可能態は質料で、それは実体本質の現実態たる形相を制限し条件付けるところの実体本質の不定性であるが、これと並行して単に実存

の可能態でしかないところの実体本質は、つねに実存の完全な現実態化を制限し条件付ける、実存と非実存との間の不定性に他ならない。実体本質がもっとも質料的であっても、そこに質料的形相という最少限度の本質現実態があれば、また実体本質がもっとも形相的で、そこに純粹形相という最大限度の本質現実態があっても、どちらの場合でもこの本質現実態は本質のそれである限り、ひとしく実存の可能態でしかなく、それによって実存の現実態が制限され条件付けられることは免れえない。存在者の実存はその存在者の本質の内的構成がなんであれ、つねに何らかの本質という実存可能によって内的に規制され制約されている。つまりその実存現実態 *actus essendi* は実存可能態でしかありえないところの実存様式 *modi essendi* たる本質、就中、実体本質によって制限される。そしてこの本質には更に本質現実態としての形相と本質可能態としての質料とがあるが、それらはいずれも存在者の内的構成の原理として実存現実としての実存に対してはあくまで実存可能にとどまり、正にその理由によって存在者の実存を内側から深く規制しているのである。

註

- (1) ここで実在的区別というのは存在論的形而上学にとって重要な、実存 *existentia* と本質 *essentia* との実在的区別の意で、これは存在の類比 *analogia entis* の問題と同様、トマス・アキナス以後スコラ哲学においていくたびか繰り返された伝統的な論争課題である。この覚え書はこの問題に対する私自身のアプローチを要約し、あわせて「哲学」57集所載の「いわゆる『第三の道』について」における田口啓子君の批判に答えようとするものである。極めて特殊な形ながら、内容的に核心にふれるものがあると思うので、あえて宮崎友愛先生の名誉教授御就任の記念論文集に寄稿させていただいた次第である。
- (2) ここにいう無条件無制限の実存とはその本質が正に実存そのものである神を意味し、これは自然的には経験不可能である。しかし絶対実存の自明化がなりたつとすれば、それは神の側からする神の自己啓示でしかなく、超自然的経験、恩寵によって贈与された宗教体験以外のものでありえない。

- (3) Thomas Aquinas: quaestiones disputatae de veritate. Q. I. in corpore et resp. ad tertium, “sed contra” 参照.
- (4) 如何なる本質構成をもった実体本質も、つまり「何であるか」について、より現実態的（形相的）であったり、より可能態的（質料的）であったりしたにせよ、それらの「がある」実存に対してそれらは全く平等に可能的でしかないことのうちに第一原因による「無からの創造」の意味がある。存在者は、いったん実存したあとでは、その質料・形相の本質構成いかんによって、種々の形の本質可変（時代性）、本質不変（永代性）の相違を生ずるが、それが実存するか、しないかはもっぱら第一原因にのみ依存し、その本質構成いかんによって実存度に甲乙がつくものでない。その本質がより形相的完全なものは本性上より多く実存的であり、その本質がより質料的不完全なものは本性上より少く実存的であるとする世界は新プラトン主義的な流出説のような図柄になってしまう。

形而上学の四原因は世界ならびに世界内の事物に関して第二原因であって、第一原因によって実存させられるものが「何であるか」「如何にであるか」を原因する。質料因と形相因とは事物本性の内的構成の原理として実体本質の「何であるか」、また、これに内属する属性本質の「何であるか」の、不定性という制限原理ないしその一定性という規定原理であり、また機動因と目的因とは事物本性の外的関連の原理として実体作用の到達点の「いかにであるか」の、不定性（偶性本質）という制限原理ないしその一定性（適性本質）という規定原理に他ならない。従って世界および世界内の事物はそれらがそのあるがままの「何であるか」「如何にであるか」については第二原因によって説明されるときも、ことそれらの実存に関しては実存を本質とする必存有のみを唯一の原因とする。「本性」と「作用」の「何であるか」「如何にであるか」の広義の「本質」に関して形而上学の四原因によって世界は階層的に説明され、そこに完全性の諸段階が認められるが、それらの実存についてはすべて平等に直接第一原因から説明される。従って観念論の説くように完全性の高い段階の実存は多く、そこから完全性の低い段階の実存が流出してくるようなこともなく、また唯物論が説くような、その逆もありえない。何となれば「何であるか」という本質がいかに実存を条件付け制限はしてみても、決して実存そのことを失わせたり、生みだしたりできないからである。条件である本質の多寡が実存を導出したり、実存を停止させたりするものでない。それは実存そのものである第一原因の専決事項にぞくする。



2.

哲学57集所載の「いわゆる第三の道について」という論考において田口啓子君は神の存在の第三証明（偶存有よりする証明）についての私の説明では「実存に対する本質の絶対的先行性」を認めねばなるまいと批判している。なるほど「偶存有においては本質と実存とは他者同志であり、実存はいつもその他者であるところの本質によって制限ないし制約されている」し、いわば実存と本質には実在的区別 *distinctio realis* があって、「何かである本質が実存を獲ると『何かである』ものが生じ、実存を失うと『何かである』ものが減する」と論じているので、「第一にここから引きだされるのは実存をうけとる以前に実存する本質という（まことに）奇妙な考えである」（右論文4頁）に違いない。もっともこの本質の先行的実存性をトマス・アキナスの神学大全第1部第15問題に従って「神のアイデアとして実存する」と考えなおすこともできるが、そうすると予め偶存有が神の被造物であることを認めることになり、それでは偶存有による神存在証明自身が「<sup>ベティシオ・プリンチピイ</sup>不当仮定の誤り」に陥いるので（右論文5頁）、この際、実存と本質の実在的区別に頼らないで第三証明を考えなおしてみようというのがその論旨である。

なるほど「本質が実存を獲得すると『何かであるもの』が生じ、実存を喪失すると『何かであるもの』が減びる」のが偶存有 *ens contingens* であるというのでは、本質にとって実存は偶性 *accidentia* であるに等しく、それではアヴィセンナの新プラトン主義とさして違いない本質優位の思想と誤解されるおそれがある。しかしトマス・アキナスによれば次の引用を俟つまでもなく、この点は正に逆で、本質にとって実存が偶性的であるよりは実存にとって本質が偶性的（正確はいえは偶然的）であるといっているのである。トマスはその初期の哲学論文「存在と本質について」*De ente et essentia* cap. VI で「一般存在はその概念中に何らかの附加を含まない

と同様にその概念中に何らかの附加の排除をも含まない。何となればそのようなことがあれば、その存在に或る何かが附加されるような、いかなる存在も考えられなくなるからである」と述べているが、ここで存在 *esse* と<sup>(1)</sup>いわれているのは実存で、何らかの附加 *aliqua additio* といわれているのは実は本質のことである。つまり存在の概念中に何らかの附加を含めば、存在は必然的に附加されることになり、また存在の概念中に附加の排除を含めば存在は必然的に附加されてはならないことになる。従ってそのどちらでもないということは存在は偶然的に附加を許すことを意味している。そして上述のようにここでいう存在は実存で、附加は本質であるから、このことは実存が偶然的に本質の附加を許すこと、換言すれば、実存にとって本質がむしろ偶性的であること、正にアヴィセンナの述べたことと反対のことを意味しているのである。同じくアリストテレスを奉じていても新プラトン主義に影響された限りでのアヴィセンナには実存に対する本質の優位の傾向が強いが、トマス・アキナスにおいては最初から実存が本質に対して優位をしめている。

一般存在 *esse commune* とはいかなる存在者にも共通に前提され、正にそのことのためにいかなる本質の存在者も存在者と名付けられるところの「がある」実存であって、これを「単的にがある」*esse simpliciter* と名付けてよいであろう。これは実存の現実態 *actus essendi* である。これに対して偶然的に附加されるあるもの *aliquid* によって「単的にがある」は制限されて「二次的にがある」*esse secundum quid* となる。それは何かである」*esse quid* という「である」本質によって制限された実存のことで、いわば存在者の本質に比例する実存である。すべて存在者の実存は、この偶然的な本質の故に二次的な実存でしかありえない。これに対して単的な実存は無制約的な実存で、それは実存を制限する本質自身が再び単的な実存であるところのものの実存に限られる。これが *Ipsium Esse* としての第一原因に他ならない。本質が実存を制限することによって二次的な実

存しか有しない存在者では実存の現実態 *actus essendi* は実存することの様式 *modus essendi* としての本質によって常に制限付けられ条件付けられているが、その制限ないし条件付けは、ちょうど合成実体において本質の現実態たる形相が本質の可能態たる質料によって内的に制約され条件付けられているように、実存の現実態が実存の可能態たる本質によって内的に制限され条件付けられているのである。本質が実存と無関係なものであればその制約ないし条件付けは外的であるが、上述したトマスの引用でも明らかなように、本質は元来、実存に偶発的でどうしても実存を前提するものであり、それは実存の現実態に対して実存の可能態でしかないものゆえ、この可能態としての本質が実存の現実態を制約し条件付けるのは全く内的なそれ以外のことではありえない。

このように本質は実存以前に実存する独立のものでなく、実存の現実態に附帯する実存様式、実存の現実態を内的に規制する実存可能態でしかなく、いわば実存現実態に向っての関係態に他ならない。従って実存現実態を首格的に存在であるとするならば、実存可能態としての本質は属格的に存在であり、両者がともに存在の名辞をもって呼ばれることは単なる偶然とはいえない。実に本質は実存以前にある別の実存でなく、単に実存可能として実存を内的に規制する実存の一契機でしかない。本質が基本的に実存的であり、その外的規制ではなく、その内的規制として結局、実存に還元さるべきことをトマス・アキナスの原典の分析を通じて明示した  
[ 最近の労作として、William E. Carlo の *The ultimate Reducibility of Essence to Existence in existential Metaphysics* 1966 を掲げることができよう。<sup>(2)</sup>

以上のことを念頭におき第三証明に用いられた偶存有についての言明を検討しなおしてみよう。「本質が実存を得て『何かである』ものが生じ、本質が実存を失って『何かである』ものが滅びる」というとき、認めざるをえない「実存に先行する本質の実存」とはもともとこの括弧内の最初の実

存と無関係のそれではない。なんとなれば本質はこの最初の実存の内的制限様式であり、実存現実態を内的に規制する実存可能態でしかないのであるから、この括弧内の最後の実存とは実は最初の実存の関係態なのである。われわれは「実存に先行する本質の実存」はさておき、「実存に先行する本質という実存可能」は認めざるをえないであろう。かくて実存は実存現実態として本質は実存可能態として、ともに実存の名辞で語ることができるようになったから、「本質が実存を得て生ずる」とは実存可能が実存現実になったのに過ぎず、また「本質が実存を失って滅する」とは実存現実が実存可能にもどったのに過ぎない。ただ実存可能としての本質にとってはこのような実存現実の得失は単にこの本質の実存可能だけからでてくる訳のものでない。単に実存可能である本質を実存現実態にするところの、あるいはすでに実存現実態になっている実存可能な本質から実存現実態を除去するところの別の現実態がどうしてもここで必要である。けだし可能態から現実態はでてこないからである。実存可能な本質は内的に規制する実存様式として実存現実態の得失に不可欠条件ではあっても、決してそのことの充分条件にはなりえないから、どうしても実存可能でしかないこの本質以外の、別の実存現実態が原因として必要である。よく実存は存在の充分条件だが、本質は必ずしも存在に必要でないという人もあるが、実は本質は存在の不可欠条件としてどうしても必要で、両者は存在の中に相関的契機として深くかかわりあっているのである。その理由を説明しよう。

さきにトマス・アキナスの言明に従って「実存が偶然的に本質に附加される」のではなく、「本質が実存に偶然的に附加される」と述べてきたが、このことは本質が存在の不可欠条件であることと一見矛盾するようであるが、必ずしもそうではない。右の言明からすると本質は必ず実存を前提するが、実存は本質を前提しないことになるので、本質を前提する「二次的に<sup>・</sup>ある<sup>・</sup>」存在者とはちがって、本質の附加がなく、従って何の制約もない「単的に<sup>・</sup>ある<sup>・</sup>」ところの第一原因では本質は不可欠条件にならないか

のようにみえる。しかしここで実存可能の本質の附加がないため実存が制限されないということは、別の表現によれば、「単的にがある」という実存現実態自身が正に自らの本質になっているということであり、その故にこそ Ipsum Esse が無制限の実存であったのでもある。<sup>(8)</sup> ただこの場合には実存が正にその本質であるために、実存と本質とはただ理拠的にのみ区別され、そこに実在的区別はみとめられない。従って実存に本質が附加されることは偶然的であるとの言明は実存と本質とが実在的に区別された場合に限られる。実在的区別だけでなく、名目的理拠的に区別されるところのものまで含めれば、実存は存在の充分条件であるとともに、本質は存在の不可欠条件であることが理論的にも貫徹せられるのである。そしてこのような理拠的な区別を第一原因に持ちこまない限り、第一原因における実存現実態の純粹性と並んでその無条件、無制約、無限絶対性はとうてい導出できないことになるのである。

さて第一原因たる神において実存と本質との区別は理拠的なものに過ぎなかったが、これをそのまま世界と世界内の事物に及ぼし、それらの実存と本質との間に理拠的区別のみみとめ実在的区別をみとめなければ結論的にいって汎神論になることは必定である。よく実在的区別は事物と事物との間にしか成り立たないと理解されるが、そうではなくて事物の側からみて別々でさえあれば充分なりたつのである。これに対して理拠的区別は事物の側からみて同一であるものを知性において別々にするだけのことであり<sup>(4)</sup>。さて上述してきたところからみると、実存と本質の区別は実は実存の現実態と実存の可能態との区別であって、丁度、本質の現実態たる形相が本質の可能態たる質料と実在的に区別されるのと同じように、必ずしも事物と事物との間の区別でない。寧ろ一つの事物を構成する現実態と可能態の実在的区別に該当し、事物の側からみてそれらが分離的であることがその特長である。<sup>(5)</sup> 神存在の第三証明に用いられた実存と本質との実在的区別が以上論じてきた意味に解されれば、神存在が証明される以前にあえて本

質を神のアイデアとまで考える必要もなく、従って第三証明を循環なしに遂行できるのではなからうか。

(1917. 8. 28)

註

- (1) Thomas Aquinas: de ente et essentia cap. VI: Esse autem commune, sicut in intellectu suo non includit aliquam additionem, ita nec includit in intellectu suo aliquam praecisionem additionis; quia, si hoc esset, nihil posset intelligi esse in quo super esse aliquid adderetur.
- (2) 「実存形而上学における本質の実存への基本的還元について」においてウィリアム・イー・カルロ教授はトーマス・アキィナスの原典を縦横に駆使し、実存の本質に対する優位を殆んど完全に証明している。本質の実存に対する優位という、それとは逆の当時一般の通念を離脱しようとするトマス自身の努力の過程で、どうしてもこの通念にもとづく言葉遣いを用いざるを得なかったため、トマスの命題にいくたの矛盾があることをカルロ教授も認めている。しかしこれと同じことはアリストテレス自身についてもいえることで、アリストテレスを本質形而上学者と定義づける、カルロ教授の考え方の出発点になっているジルソン教授の考え方に小生は些か疑問をもっている。本質形而上学の典型はプラトンとプラトン主義哲学にこそあれ、アリストテレス哲学はむしろそれから実存形而上学への脱脚の方向にある。トマスの場合と同様、本質形而上学の言葉遣いを用い、幾多の矛盾を伴いながらも、そこに歴然たる実存への動向を読みとるべきではなからうか。トマス・アキィナスの実存形而上学は彼がキリスト教的啓示を受容する神学者であったことから生じたとする考えがげんざい優勢であるが、私はトマスはその哲学自体の立場から、正にアリストテレスの意向に従って *secundum intentionem Aristotelis* 実存形而上学に向いえたと考えたい。アリストテレスを本質至上主義的なプラトン哲学の後継者とみる近頃の流行の見方がアリストテレス自身がそれからの脱脚に如何に苦闘したかの姿を見失わせたのではなからうか。トマスの実存形而上学はなにもキリスト教神学にもとづくものでない。その証拠には同じくキリスト教の真正な信奉者であった当時の多くの哲学者達がそのプラトン主義の故に充分本質形而上学者にとどまりえたという事実がある。

こういうことの結果か、カルロ教授の追跡は自然神学の第一原因論よりも専ら啓示神学に属する創造論を基準にして展開されている嫌いがある。しか

し本質形而上学に対する実存形而上学の優位は哲学の自律的な原理の範囲内で確立されるし、また確立さるべき問題であると思う。

また形而上学の基礎概念としての現実態<sup>アクトゥス</sup>と可能態<sup>ポテンチア</sup>の各々を規定性と制約性とに相応させることによって、実存に対する本質の、形相に対する質料の、もう一段積極的な内的関連の仕方が究明されてよかったのではなかろうか。カルロ教授は質料を *non esse* としないで *esse debile* とすることを積極的評価とされているが、それでは新プラトン主義的な流出説と大差ないので、私はむしろ質料の実存性を本質に制約された実存の現実態との関連において捕え、自然学の範囲でなく、形而上学の視野にたつて、質料を含む存在者各階層の実体変化の歴史的実在性格を積極的に説明するものとして質料因を特に重要視してゆきたい。

- (3) 「単的にがある」実存を制限し条件付ける本質自身が「単的にがある」実存であるとすれば、制限し条件付けるものが、制限され条件付けられるものと同一であるから、それは無制限、無条件、従って絶対でしかありえない。
- (4) Josef Gredt: *elementa philosophiae Aristotelico-Thomisticae* T. I. p. 102 : *distinctio realis est, vi cuius unum a parte rei non est aliud, distinctio rationalis est, vi cuius ea, quae a parte rei sunt idem, in intellectu et ab intellectu inveniuntur distincta.*
- (15) op. cit. T. II. p. 39.: *potentia et actus, quatenus constituunt ens unum. actus et potentia ei respondens realiter distinguuntur.....nam aliquando actus realiter est separabilis a potentia (ut actus intelligendi ab intellectu) et tunc sane realiter distinguuntur: realis enim separatio maximum signum realis distinctionis.*
- (6) 以上、実在的区別を哲学史的というより体系的立場から扱ってきたが、抑々この区別の主唱者はトミストのエギヂウス・ロマヌスで、それ以来何世紀に亘って論争の的になってきた。上記したウィリアム・カルロの著書でもこれが扱われているが、これはついでには寧ろ柏木英彦君の左記の論考を参照されたい。

「エギヂウス・ロマヌスにおける *esse* と *essentia*」1961年、哲学40集。

「*quaestiones disputatae de esse et essentia* に関するノート」1963年哲学43集

「創造と *Possibile Esse*」覚え書 1966年、哲学49集。

## Remarks on real distinction between existence and essence

Masao Matsumoto

### Résumé

Actus of essence is form, and potentia of essence is matter. The form means definability of "what is", and plays the roll of determining principle; the matter means indefinability of "what is" and plays the roll of limiting principle. According to the tradition since Pythagoras definability is "the determination by one" and indefinability is "the determination by two," or in other words, limitation.

When we shift our attention from the dimension of essence to that of existence, actus and potentia, the fundamental concepts in metaphysics, come to relate themselves existence, and as a result our concern transfers to the division between actus of existence and potentia of existence. Actus of existence means *esse simpliciter* i.e. actus essendi, and this is existence in proper sense and is existence as determining principle. On the otherhand, potentia of existence means *esse quid* as essence (whatness) i.e. modi essendi, categories of being in wider sense, and usually these are represented by the category of substance. Whatever hylo-morphological structure of substance might be, that is, either more material or more formal, the substance remains to be potentia against existence. As existence of a being proportionates to its essence, the essence itself constitutes an indispensable momentum of the existence.

Not that the existence follows the essence, the essence follows the existence. Though the essence limits and conditions the existence, the essence cannot play the roll of determining in the place of existence. The roll of the essence in limiting and conditioning the existence must be preceded by the roll of existence to determine.



The existence, after all, maintains its primacy over the essence.

The distinction between existence and essence is real. *Distinctio realis* consists not only in the difference of things but also in a case, where the reason of distinction is recognized from the side of thing (*a parte rei*). Therefore there is exactly the same kind of distinction between existence as *actus* of existence and essence as *potentia* of existence, as that between form as *actus* of essence and matter as *potentia* of essence.